

⑩ 豊臣秀吉書状

〔年未詳 文禄四年（一五九五）カ 大納言（徳川家康カ）宛〕

かへす（かへす）すき
とよくなり候はん間、
此方へもむやう

にて候

わつらいなにと候や、
心もとなく候まゝ、
一ふてとりむかいまいらせ候、
われ（われ）心かはやよく
候間心やすく候べく候、
けさたけた進之候、
よくやうしやう候て可然候、
かしく

大なごん殿 大かう

読み

患いなにと候や、心もとなく候まゝ、一筆とりむかいまいらせ候、われ（われ）心かはやく候間、心やすく候べく候、今朝たけたまいらせ候、よく養生候てしかるべく候、かしく

返すがえすすきと良くなり候はん間、この方へも無用にて候、

大納言殿 大かう

内容

あなたの患いはいかがでしょうか。不安な気持ちのまま手紙を書いていきます。私は（容体がよくなり）心が明るくなっていますので、安心してください。今朝（医師の）竹田をまいらせませす。よく養生してください。

繰り返しですが（こちらは）すっきりと良くなっているのでご心配なくしてください。

秀吉（太閤）独特の筆使いで味のある書状です。大納言とは徳川家康のことと思われませす。そのころ両者とも病気がちでしたが、少し体調のよくなった秀吉が家康のことを心配して書いたもので、親愛の情が伝わってきます。年不詳ですが、両者の病気の歴史を調べていくと文禄四年（一五九五）に書いたものとも考えられます。